

純潔と寛容(五)

本多弘之

honda hiroyuki

随縁

現代文明は人間の理性によってつくられてきた。この文明の延長上に、きっと平和で幸福な社会が築けるであろうという期待に満ちて「進歩」してきた。いろいろな難問が出てきたとはいえ、いまだにそれが信じられて、歴史が動いているようである。たしかに、家庭用の電化製品や乗用車、あるいは遠距離移動のための列車や飛行機などに代表される、近代の科学技術の応用による「文明の利器」の進歩はめざましい。なかでも、近年のイン

ターネットの普及による伝達手段の変化も、あれよあれよと見ている間に急速に変わっていく。

しかし、そういう技術文明の変化を「環境」として生きている「生存」そのもの、すなわ

ち私たち一人ひとりの生活の内面はどのようなであろうか。生きるということは、環境との関わりをどのようにつくっていくかということにほかならないのだから、環境が進歩するということは、主体も進歩することになるの

ではないか、と私たちは考えがちである。けれども、これは大いなる錯覚なのではないか。

試みに、私たちの主体の側の意識について考えてみよう。意識の内容は、日進月歩する技術や工業製品に振り回されながら、現代の文明の利器に関わる事柄で埋め尽くされている。早い話が、ほとんどの時間がテレビや新聞、映画やインターネットの情報にどっぷりと浸けられているのである。そういう内容を意識しているということ、意識そのものが意識内容を感じ取って生きているという意識とは、重層的に響き合っているので、——ちよつと面倒なのではあるが——意識されている内容とそれを意識している意識それ自体とは、一応分けて考えなければなるまい。

例えば、どのように精密な機械を見張つていても、見張っている人間の意識は疲れたり油断したりしてしまうものである。どれほど堅牢な機械を操作していても、それに携わる人間が、堅牢であるとは限らない。だから文明社会に生きている人間は、文明の情報についての知識はあるだろうけれども、その人間が、そのまま文明の機械技術の正確さや精巧さを生きているわけではない。当たり前のようにだけれども、それをどこかで混乱するから、歴史や社会の成り立ちが違う場所を生きている人びとを「野蠻」な人間であるなどと主張することがまかり通ることにもなるのである。

だから言うならば、文明を生きる空間は、文明を成り立たせている知識空間なのであって、それを知っているということ、それを映して生きている存在それ自体とは、層の違うレベルにあることを知らなければならぬと思うのである。

この文章のテーマである「純潔と寛容」ということは、こういうことから言うと、知識のレベルでの問題ではない。つまり、意識の内容の問題ではない。人間存在が煩悩を感じ、苦悩の生活に惑うことを、どのように克服できるかということに関わるテーマとして、いまは考えようとしているので、知識の操作よりも深層の問題として押さえたいからである。善導(ぜんどう)(六一—三六八)という方が、人間のこのころを「随縁(ずいゑん)」のものと押さえた。縁によつて意識は動かされるものだからである。動かないところなどというものは、分別(ぶんべつ)・理性で考えられた架空のものにすぎない。縁を映して動く意識だからこそ、縁に応じて生きていることを支えることができるのである。けれどもそれ故に、縁によつて苦しめられ迷わされる弱みを脱出できないのが、意識なのである。

しかも、その意識の集積を、自己自身として持続するものがある。どのような縁をも、自己自身の因縁として感じて生きている事実がある。その自己は、限定された身体と環境

をもつて生きているのである。そこにすでに限定を受けて、けつしてその限定を超えることができない。狹隘(きょうがい)なところと限られた環境条件と、ほんのわずかな人間関係を、自己をとりまく関係として、私たちは生きているのである。そこに動く関心も「随縁」であるから思うにまかせない。さらには自己中心の関心がそれを蔽(おほ)っているから、人間には「随縁の雑善(ざざん)」しかないと言われる。

「雑」であることは、「随縁」であることからくる。いろいろなもの縁として与えられるのであって、こちらから縁を決めることはできない。だから、親鸞(しんらん)は人間の本質を、罪業(ざいごう)深重(しんじゆう)と感じられたのであろう。「殺すべき縁」があれば殺すこともあるし、奪(うば)うべき縁がよおせば、奪(うば)うこともある。まさに混じりけの縁に浮遊する存在なのである。

そういう「雑毒(ざつどく)雑心(ざしん)」の存在にとつて、如来の純粹性とは、何であるか。「雑」である有限なる存在を、その有限の身のみが、この世で無限なる大悲のはたらく場所であると見直すような智慧、有限こそが無限の表現するかたちであると頷(うな)くようなところ、それにおいてまったく不純粹なるものを摺(す)り尽くして、少しも濁らないものを「清淨(せいじやう)願心(がんしん)」のはらたきであると教えているのであろう。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)